

「ハウスガーデン」London, U.K.

設計=6aアーキテクツ

参照 | 本誌pp.6-17

フェデリコ・トランファ

なぜロンドンのとある庭付き住宅をニュースにすべきなのか? その訳はさまざまであるが、主な理由は、トム・エマーソンとステファニー・マクナルドが主宰する建築設計事務所の歴史に深く根差している。自然と人工の関係に対する彼らの関心はあまりに明瞭なため、以前に写真家ユルゲン・テラーのスタジオのプロジェクトを解説した際、すでに指摘しておいた(『CASABELLA』895号、2019)。あの作品と比べると、イズリントン・ロンドン自治区にこのほど完成した住宅は、環境意識を建築プロジェクトの総合的なサステナビリティとして捉える方向への、さらなる一歩を表わしている。近代のパラダイムでは、建築と自然は対立関係にあり^[注1]、実際に浸透し合うことはない。ピロティのおかげで地表との関係は特定地点に留まり、建物は——緑に囲まれる場合でも——真に自然と混成するわけではない。とは言え、19世紀から20世紀の都市計画は、都市という強力な思想をわれわれに託した最後の動きであるが、庭や公園に自然を閉じ込めた。これら

グリーン・ラング

緑の肺は、有機的なデザインで周囲の都市ブロックの厳



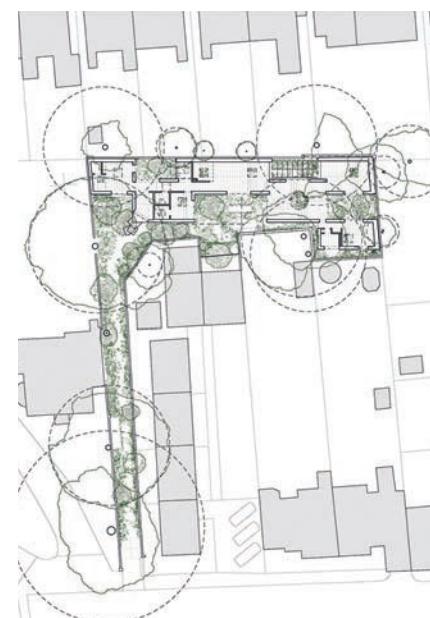
エントランス廻り

密な幾何学と対置されていた。現在、そうした同じ大都市では、確立された秩序の欠如により、何世紀にもわたる丁重な共存の諸規則が議論に付されている。リチャード・シドニー・リッチモンド・フィッターが『ロンドンの博物誌』に書き、また後に造園家ジル・クレマンが「第3の風景」と定義したものは、いくつかのヴィジョンとして6aアーキテクツの自然主義的思想^[注2]に同時に存在している。じつに経験主義的でじつに説得的なアプローチは、「ツリー・ハウス」(ステップニー・グリーン、ロンドン、2013)のプロジェクト以来、顕著となっている。それは1830年建造のコテージを、車椅子生活を余儀なくされた人のために木造で増築したプロジェクトである。現代の西欧諸都市では、文化的に和解しえない2つの現象の同時存在が記録されている。すなわち、測定不能なほどの大規模な不動産投資と、既存物の修復技術と見なされた建築の成功である。ここには、広い土地より間隙を、フォルムの純粹さより混成を好み、自然の構成要素に安定装置の役割を与える様式が見られる。本稿で論じるプロジェクトは、ガレージという技術的な建物の、個人住宅への置き換えから生まれた。この都市的出来事は、見た目こそ取るに足らないが、実際は現在進行形のさまざまな変化を象徴している。建築家たちに任された土地は、長さ46m、幅10~15mの細長い小区画で、都市ブロックの内側に隠れており、60mの直線的な歩道で外部と連絡する。敷地は近隣住宅の庭を囲む塀に囲まれているため、プロジェクトは2つの厳しい条件から展開することを余儀なくされた。すなわち、新築部分の高さは一番低い周壁の高さ(4.3m)を越えてはならず、周辺の庭の立ち木の根をいかなる形でも傷つけはならなかつた。住宅の輪郭と断面を整えるうえで2つの要素が決定的となった。住宅の建築面積は結果として残りの空地面積と同一となり、この等価関係は建築空間を緑地の空間の結果として、またその逆として読むよう促すこととなった。いずれの場合でも、これらの厳しい制約が、プロジェクトの基本的特質となる屋内と屋外の「部屋」のシーケンスを具体化するのに役立つ。

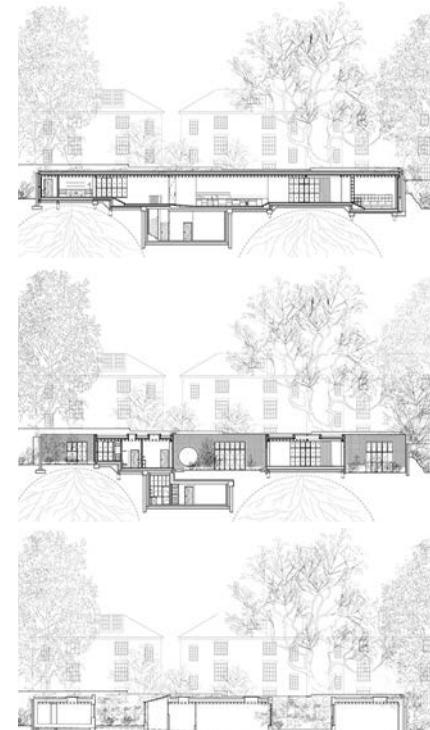
建物は東から西に1本の長い主軸に貫かれ、それに沿ってすべての空間が互い違いに向かい合っている。建設に使われた素材は、住宅における地表との密接な関係を映し出す。外壁の表層はテラコッタ製の柿板張りで覆われる一方、屋内の壁は土に基づく物質的な漆喰仕上げとされた。住宅の木造構造は屋根の内側に見てとれ、白く

塗られた細い梁が密に組まれているのが特徴的である。

屋根に開けられたトップライトは、それぞれ最も近い樹木の枝葉が見えるよう配置されている。リビングは冬菩提樹、寝室の周囲はマロニエ、温室テラスと書斎の上にはニセアカシアの木がそれぞれ茂る。屋外空間はあらゆる点で部屋であり、それぞれが面する屋内空間と運動して



1階平面図



断面図

無断での本誌の一部、または全体の複写・複製・転載等を禁じます。

©2023 Arnoldo Mondadori Editore

©2023 Architects Studio Japan

世紀の見事なカサ・デ・ベシノスがある。これはPAX戦略の試験的プロジェクトでありシンボルである。これまで幾度も「パティオ祭」で第1等をとり、ユネスコの無形文化遺産候補審査の主役となった住宅には、なんと16世帯が暮らしていた。設備や居住性の質は低く、住民はパティオの屋外空間に水廻りとキッチンを設けて共同使用していた。拡張する都市において不動産バブルと、新たな住宅建設に基づく都市モデルの遠心的傾向により、環境的にも社会的にもサステナビリティは不確かになり、旧市街の継続的な過疎化、そこを居住可能にするサービスの低下、カサ・デ・ベシノスの建築タイプロジーの放棄が生じた。こうしてモンテロ路地12番地には、マグダレナ——荒廃が進む多世帯空間の所有者で唯一の住民——だけが残った。彼女の2人の娘は、不動産をPAX戦略から生まれたグループに売る決心をした——観光業者が提示するはるかに高額の利益を辞退して。これにより最初のPAXアストロナウタス協同組合が生まれることとなった。6歳から10歳の子供のいる6家族が、この共生がもたらす教育的、共同体的価値を求めて1つのカサ・デ・ベ



共用エントランス



南側テラスより見る



北側テラスより見る

シノスを共同所有することを決めた。

プロジェクトは建物の文化遺産的価値の現代化を基盤に、人間集団の社会的構成要素も建物の環境的、建築的クオリティも強化した。社会的サステナビリティを明記するために協同組合の規約を使い、共同生活の規則を志向する共同体に伴走することは、建築プロジェクト、その建設技術、そして屋外空間であり共生の場であるとともに有孔性としてパティオを扱うことのサステナビリティと不可分である。こうして、建築プロジェクトは文化遺産を、その住民との共同デザインの道程を通して現代的な視点から再読することとなった。6つの住宅の配置は、建築構造の尊重、パティオ側に開く版築造の壁が連続して形づくられた空間と両立するかぎりにおいて、協同組合のメンバーの要望に応じて生まれた。共同体の場として、パティオ、テラス、洗濯場は協同組合が民主的で対等なかたちで共有する要素である。漆喰仕上げ、あるいは手塗りのモルタル床といった伝統技術の活用は、温風暖房装置や床暖房のような低消費のグリーン・エネルギー技術を利用したおかげで、この歴史遺産を居住可能にする各種設備の最適化と統合された。3つのパティオが屋外空間として連続する構成は、真の再生された都市風景であり、環境的、物理的、経済的、そして社会的な次元を結び付ける。

自然主義的クオリティを強化し、ヒートアイランド効果を低減させるため、地面と植物の処理では、水分蒸散力を

保証する小石敷きの屋外舗床が再発見された。地中海都市に特有の植物——ブーゲンビリア、ジャスミン、レモン、ブドウの木——は、パッシブな空気循環システムに貢献する。その一方で、香りがよく果実をつける樹木は将来世代のための教育機会となる。住宅内部の生活は屋外空間と連続しており、自然光をプロジェクトのさらなる素材として組み入れている。パティオとその植物の熱特性を方角別に研究することにより、歴史都市の有孔性がもたらす環境保全的諸特質の維持がいかにレジリエンスの一形態となるか、また特に温帯気候下で気候変動に対抗すると同時に、地中海的共生を現代的なものに変えられるかが証明された。根本的だったのは、地域と結び付き、伝統的な建設技術の深い知識を備えた小規模な



各階平面図/断面図



第1パティオ

ビ ジ ャ 31

「ビジャ31」Buenos Aires, Argentine

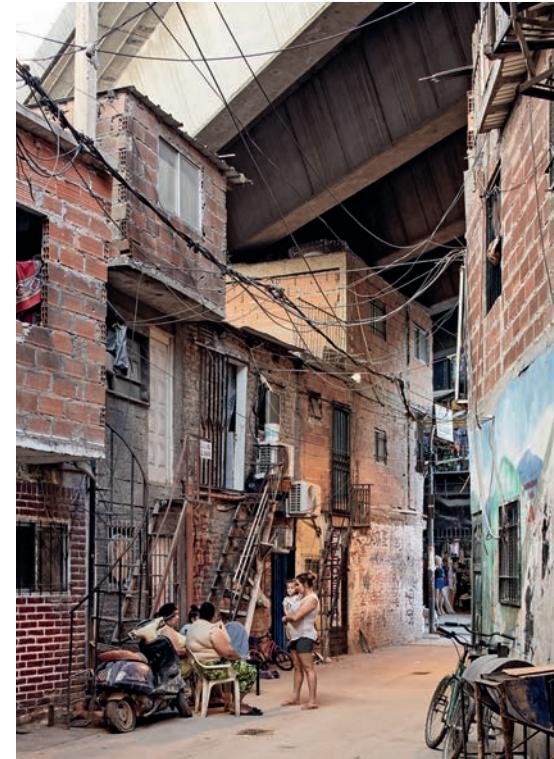
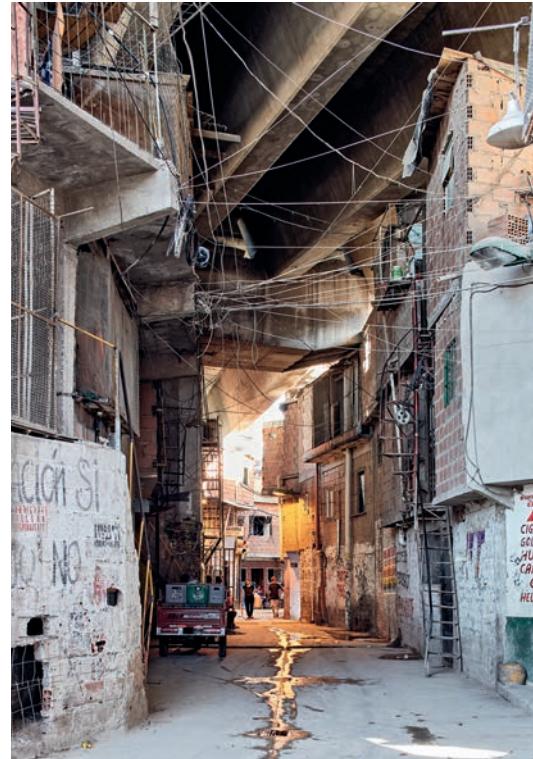
撮影=クリストバル・パルマ

羞恥心の都市計画:ビジャ31 カミッロ・マーニ

参照 | 本誌pp.38-47

作家ベルナルド・ヴェルビツキーは1957年に小説『Villa Miseria también es América(貧民街もアメリカである)』を書き、そこでスラム街の生活とさまざまな貧困を描写した。それ以来、アルゼンチンでは非合法居住区を呼ぶに「ビジャ」または「ビジャ・ミセリア」の語が使われる。この言葉は南米大陸ですでに使われていた多くの同義語に加えられた——ファヴェーラス(ブラジル)、カンテグリレス(ウルグアイ)、ポプラシオネス・カラランパス(チリ)、トゥグリオス、プエブロス・ホビネス(ペルー)、シウダデラス(ボリビア)、チャカリタス(巴拉グアイ)、ランチョス(ベネズエラ)、そしてシャボラス。こうした語義の多様性は、貧困もしくは非合法と呼ばれる側面を越える複雑さを呈した、同じ現象を観察する複数のニュアンスを露わにし、困窮し周縁化された住民たちによる都市住居の建設を考察するより広い方法へと向かわせる。

アルゼンチンの数多くの非合法居住区の中でも、ブエノスアイレスの「ビジャ31」は同市に関する報道によっておそらく最も有名になり、また最も激しく非難され烙印を押された地区である。1950年代末に、市内で最も高級なブエルト・マデロ地区の境界部分とレティロ・サン・マルティン駅の周辺に形成されたビジャは、現在6万人の住民を抱えている。この一片の土地では、都市の整然とした構成が崩れて何本もの入り組んだ路地へと変わり、そ



こに低層の家が所狭しと並ぶ。建物の大半は未完成で、崩れ落ちそうで、煉瓦、鉄板、木材のような廉価な素材で作られている。インフラストラクチャーは最小限しかなく、公共の設備や空間もごくわずかである。

クリストバル・パルマがブエノスアイレスのビジャ31地区で撮影した写真を見ていると、フリードリッヒ・エンゲルスが1845年に出版した『イギリスにおける労働者階級の状態』[邦訳書:一條和生・杉山忠平訳、岩波文庫、1990]の内容が思い浮かぶ。当然ながら、ビジャ31の住民たちが

置かれた状況は、エンゲルスが描写したノッティンガム、グラスゴー、マンチェスターで暮らす労働者たちのそれと比較することはできない。しかし、18世紀のマンチェスターと同じくビジャ31も、見ないために、隠して隔離するために、建てられた都市の一部に思われる。ブエノスアイレスでは、高速横断道路がビジャ31の屋根になっている。高速道のおかげで、2つ別様の生活形態が互いに見えないまま展開し、一方が他方の上を流れている。本誌に掲載した写真を観察すると——ただし世界各地で類似の写真を撮ることが可能であろう——、自問せざるを得ない。われわれが生きるグローバルな世界で都市の成長を統制する諸法規は、エンゲルスが書いたように、かつてマンチェスターでは「左右に見られるこのうえなく不潔な困窮の近くに入り込んでいることに気づかずには、ゆたかな富豪階級は近道をして全労働者街のまんなかを通って、町の中心にある自分の事務所に行」けたが、こうした労働者住宅では「人間性を失い、堕落し、知的にも道徳的にも獸になりさがり、肉体的にも病的な人種だけが、心地よさとくつろぎを感じることができた」ような時代とほとんど変わっていないと考えるのは、本当にこじつけなのだろうか、と。



無断での本誌の一部、または全体の複写・複製・転載等を禁じます。

©2023 Arnoldo Mondadori Editore

©2023 Architects Studio Japan

準カラーチャートRALから選ばれたのではなく、取り壊された農家の各部にあった色を再現するために塗料を混合して作られた。屋内空間の素材と色彩は無駄がなく簡潔である——垂直と水平の構造材の打ち放しコンクリート、コンクリートを打ち固めた床、階段、窓枠、その他の表層仕上げに使われたモミ材のパネルと樽板。例外は、トレウ邸のアクセス階段に見られる興味深いコルゲート鋼板の天井裏で、そこには赤と黒で交互に塗られた木製の帯が使われた。

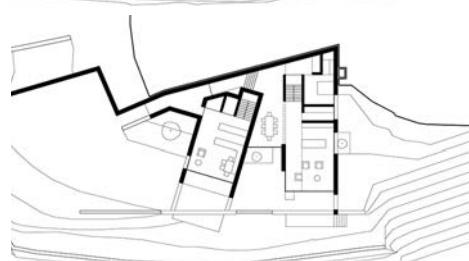
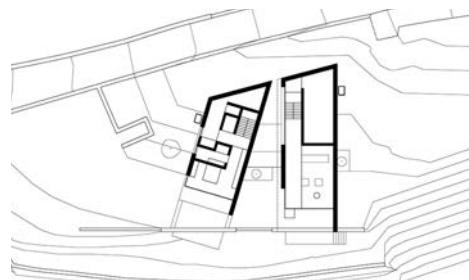
つまるところこの住宅は、立体的な構成、居住空間の有機的組織、ディテールのデザインと施工の管理への配慮——こうした性質とクオリティはベルクマイスター・ヴォルフの仕事に特有である——の洗練されたレッスンと言え

よう。それだけでなく、いかにプロジェクトが場の潜在力を解釈し、新たな風景を構築できるかを証言するのである。

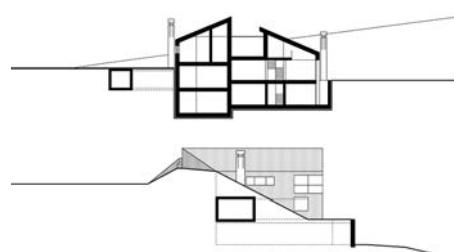
作品: ヴィラ TS | 設計: ベルクマイスター・ヴォルフ
協働者: Claudio Triassi | 構造: Georg Kofler
設備: Energy pro, Bolzano; E-plan, Bressanone
施工: Dallio Bau gmbh(建築); Lignoalp(木構造); Askeen(窓); Tammerle(家具); Häusl(鉄骨); Lichtstudio(照明); Elektro Halle(電気設備)
現場監理: Rudi Kofler | 建築主: Treu e Sessner
規模: 延床面積 550 m² / 容積 843 m³
スケジュール: 設計 2019年 / 施工 2021年
所在地: Montagna, Bolzano, Italy



オープン・デッキ



各階平面図



断面図/西立面図



リビング・エリア

「SorteoTec宝くじの家」Monterrey, Mexico

設計: アレハンドロ・アラヴェナ / エレメンタル

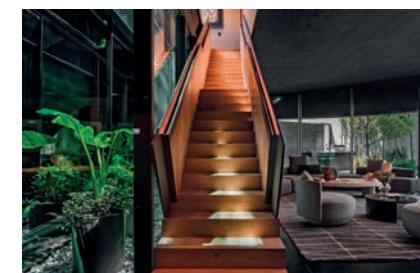
参照 | 本誌 pp.86-95

CASABELLA編集部

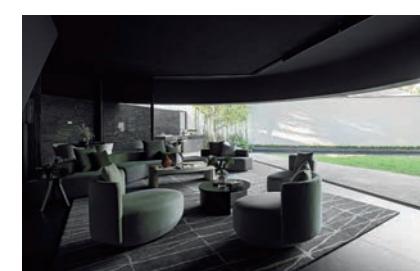
宝くじ賞品としての住宅。建築家にとって建築主との緊密な関係を結ぶことが重要だと普通に考えて設計をするのは、本作の場合たしかに建築主はいるものの、明らかに意味がない。何が独特なのかを理解するには、数行を費やす必要がある。1943年。ビール醸造で成功し、財産を作ったエウヘニオ・ガルサ・サダは、他の発起人とともにTecすなわちモンテレイ高等工科学院をメキシコに設立した(1973年、ガルサ・サダは極左組織のメンバー数人ににより暗殺された)。Tecは私立大学だったため、1947年に付属図書館の建設費を捻出すべくSorteoTecという民



最上階: 室内よりテラスを見る



階段室



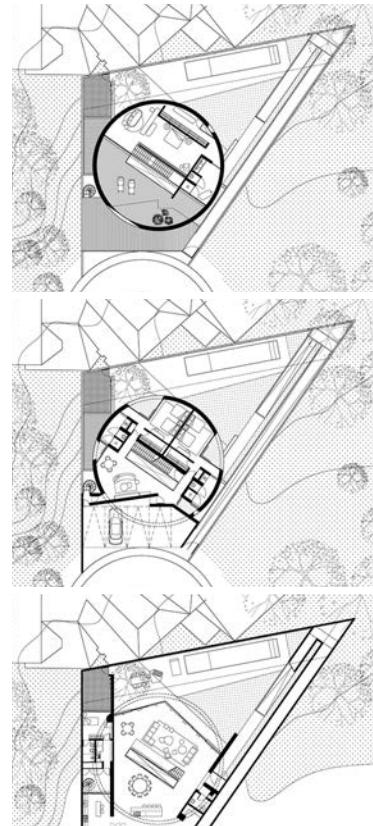
地階のリビング・エリア

賞宝くじが企画された(1枚50ペソで1500枚が売り出され、1等賞品は高級車リンカーンだった)。この事業が成功し、1954年から宝くじ賞品は1軒の住宅に変わった。当然ながら「夢のような家」である。初代の住宅を設計したのはアルマンド・レビセである。彼に続いて、著名な者も含めて他の建築家たちが参加した。この後の時代にTecは著しい発展を遂げた。現在は、メキシコの25都市に約30のキャンパスを運営している。世界最高レベルの大学を序列化した何とも言い難いランキング表の上位にはいない(大学の原点とされるボローニャ大学が167位のなか、170位にランクされるモンテレイの大学は、卒業後に億万長者になった出身学生の数では統計的に最上位と評価される)。「ドリーム・ハウス宝くじ」は、現在第213回目に達した。その1等賞品となる住宅の設計はアレハンドロ・アラヴェナに依頼され、これは質が飛躍的に上がったことを示すと言わざるを得ない。もちろん、宝くじは下位の賞も住宅以外に割り当てており、主催者側も1等賞品を設計した建築家も、利益はTec入学者の奨学金に充てられ活用されると明言している。住宅はまったく少なくない額の賞品である。約370万ドルに相当し、 614m^2 の床面積をもつ3階建てである。プールと複数のパティオに加え、1階には4台の自動車用のガレージもある。城(城でなければどんな「ドリーム・ハウス」があり得るだろう?)は鉄筋コンクリート造で、ボリュームは接地面の輪郭をそのまま共有空間として保つつつ、地表から垂直に立ち上がる。また中央の VOID も屋根頂部まで延びている。この住宅の特徴は何かを総括的に説明するにあたり、アラヴェナ/エレメンタルは、ルイス・カーンが「サービスされる空間とサービスする空間」について語ったこと、ロビン・エヴァンスが毎日の生活における私的な動きについて考察したこと、アドルフ・ロースがラウムプランを語る際に言おうとしたことを考慮したと明言している。どの読者も、好きなようにこれらの示唆を使うことができよう。ただし、読者各位がSorteoTecに衝撃を受けたであろうことは想像に難くない。この物語を語るわれわれ編集部も、次の問い合わせが浮かぶほどに衝撃を受けている。時代状況を鑑みるに、世界のこちら側でも大金を集める宝くじを奨励し、大学機関を資金援助するのは良いアイデアではないだろうか?

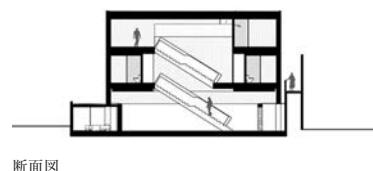
作品:SorteoTec 宝くじの家

設計:アレハンドロ・アラヴェナ/エレメンタル

設計チーム:アレハンドロ・アラヴェナ; Gonzalo Arteaga,



各階平面図



断面図

Victor Oddó, Diego Torres, Juan Cerdá

設計責任者:Juan Cerdá

協働者:André Barros, Carla Donato,

Diego Teran, Mara Cruz, Federica Tebaldi (照明)

構造:SODICO ingeniería y Diseño –

Raúl y Jorge Santos

施工:EDAGA – Homero Galindo

内装設計:Línea Vertical – Ana Landa

構造・素材:鉄筋コンクリート、

コンクリート・ブロック、ガラス

規模:敷地面積 614m^2

スケジュール:設計 2020-21年 / 施工 2021-22年

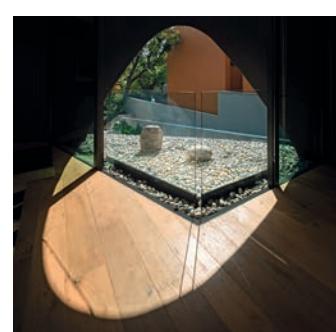
所在地:Monterrey, Mexico



上空より見る



地階の庭園より見る



パティオ



外壁のディテール

無断での本誌の一部、または全体の複写・複製・転載等を禁じます。

©2023 Arnoldo Mondadori Editore

©2023 Architects Studio Japan